昭和五八年一〇月一二日第三種郵便物認可
平成二四年九月五日発行
（毎月一回五日発行）第三七九号

東方

Eastern Book Review
379
2012 9 September

❖書評
唐宋禅研究への大胆な提言
『虚構ゆえの真実』
末木 文美士
*
遣隋使研究の新地平
『遣隋使がみた風景』
丸山 裕美子
*
生活者から見た上海一〇〇年の歴史
『上海　都市生活の現代史』
佐藤 量

❖シンポジウム報告
中国昆明から発信するデジタルアーカイブ
湯浅 邦弘

❖エッセイ
中国民居を巡る
高村 雅彦

❖レポート
近現代中国研究に訪れた本格的なデジタル化の時代
——『申報数拠庫』の紹介
佐藤 仁史
*
中国の化石が垣間見せてくれる「本当の」恐竜進化
真鍋 真

東方書店

遣隋使研究の新地平

丸山裕美子

長く豊かな蓄積を誇る遣隋使研究に、こうして新しい地平を感じることができるのは、うれしい驚きである。

日本古代史研究者にとって、遣隋使の問題は、日本古代国家＝律令制国家の成立に関わる大きなテーマであり、国際関係史（外交史・交流史）だけでなく政治史・文化史の視点からも多くの研究成果が積み上げられてきた。東洋史（中国史）研究者も、東アジアの国際情勢と遣隋使についての優れた分析を提出していること、周知のところである。それらの先行研究に対して批判はできても、新しい視点を示すことは最早難しいのではないかと思っていた。しかし近年、新しい視点から遣隋使を論じた研究書が相次いで二冊出されて、評者の懸念は浅学菲才故の杞憂とわかった。一冊は気鋭の若手研究者である河上麻由子氏の著書『古代アジア世界の対外交渉と仏教』（山川出版社、二〇一一年）であり、もう一冊が本書である。

河上氏の著書は、東晋以降の東アジアの国際関係において、「仏教的朝貢」という形態が存在していたことを指摘し、遣隋使が仏教色を強調したことの政治的意味を明らかにしている。仏教には対外交渉を円滑にする役割があったという斬新な説は、コロンブスの卵的な発想で、今後さらに検討が加えられるであろうが、評者などは蒙を啓かれる思いがした。

さてもう一方の本書は、『日本書紀』に記された六〇七年の遣隋使派遣から一四〇〇年にあたる二〇〇七年に、明治大学で開催されたシンポジウム「東アジア史上の遣隋使」に基づく論文集である。シンポジウム報告者だけでなく、さらに執筆者を加えて、多彩で多様な遣隋使の姿を描き出すことに成功している。副題は「東アジアからの新視点」であるが、「東アジア」という視点だけなら、これまでにももちろん先行研究はたくさんある、というより、東アジアという視点をもたない遣隋使研究などないといってもよい。本書の「新視点」とは、これまで十分に検討されてきたとはいいがたい「隋」という中国王朝の実態や国情に正面から踏み込んで、そのなかでの倭国使を描いた点にある。

氣賀澤保規編
遣隋使がみた風景
——東アジアからの新視点

A5判　458頁
八木書店［3990円］

ではここで本書の構成・執筆者を掲げよう。

序章　東アジアからみた遣隋使
——概説と課題（氣賀澤保規）

第Ⅰ部　遣隋使と国際関係
1　『隋書』倭国伝からみた遣隋使（氣賀澤保規）
2　東アジアの国際関係と遣隋使（金子修一）
3　朝鮮からみた遣隋使（田中俊明）
4　アジア交流史からみた遣隋使
——煬帝の二度の国際フェスティバルの狭間で（氣賀澤保規）

第Ⅱ部　遣隋使とその時代の諸相
1　推古朝と遣隋使（吉村武彦）
2　遣隋使の国書（川本芳昭）
3　遣隋使と飛鳥の諸宮（林部均）
4　遣隋使の「致書」国書と仏教（河内春人）

第Ⅲ部　倭人と隋人がみた風景
1　倭人がみた隋の風景（氣賀澤保規）
2　隋人がみた倭の風景（鐘江宏之）
3　遣隋使のもたらした文物（池田温）

終章　遣隋使の新たな地平へ
——おわりに寄せて（氣賀澤保規）

付録として、遣隋使関係の史料集（河内春人・高瀬奈津子・江川式部）、人物略伝（河内春人）、地図（高瀬奈津子、なお地図には隋代・唐初の東アジア世界の国際関係模式図を含む）、隋代の官制図、年表（石見清裕）、参考文献リスト、及び新聞記者（岡本公樹）によるコラム「遣隋使」が載せられている。付録だけで七〇頁余あり、有益である。冒頭にはカラー口絵が八頁（二六図）あり、また本文中も随所に図版や写真が挿み込まれていて、「遣隋使がみた風景」をイメージする手助けをしてくれる。

専門の研究者以外にも広く一般の読者を想定して、史料はほとんどが読み下され、あるいは現代語訳されたり要約されたりしていて、読みやすい。それにも関わらず、単なる研究史整理や、概説ではなく、新しい知見を盛り込んだ専門的な記述であるのは、錚々たる執筆者の顔ぶ

並木頼寿著作選Ⅱ
近現代の日中関係を問う
透徹した史眼と温かいまなざしで、日・中の近現代史を考究しつづけた著者の最後の著作。明治期日本人の中国観、日中間教科書問題の諸相、中国研究を見つめての三部で構成する。　研文選書115　2940円

並木頼寿著作選Ⅰ——研文選書106　2940円
東アジアに「近代」を問う
近代中国をみつめた著者の学術エッセイ。
並木頼寿著——9450円

捻軍と華北社会
——近代中国における民衆反乱
並木頼寿・大里浩秋・砂山幸雄編——10500円

近代中国・教科書と日本

——好評発売中——

岸本美緒著　明清史論集
1　風俗と時代観　研文選書112　2940円
2　地域社会論再考　研文選書113　2940円
社会秩序論への関心を基調とし、1には時代区分論と風俗論を、2には市場論と暴力論を中心に、中国史上の諸トピックを広い視野から描く。

研文出版
東京・神田神保町2-7　☎3261-9337
http://www.kenbunshuppan.com/

れからして流石というべきなのであろう。以下に、評者の関心に沿って、いくつかの章を簡単に紹介したい。

まず序章は、遣隋使及び遣隋使研究についての概説と課題、問題点について、丁寧にまとめてあって、ありがたい。主要な論点はほぼ網羅されており、問題点に対しての回答が示されているわけではないが、本書の各論部分への導入としての配慮が窺える。

第Ⅰ部では、金子修一「東アジアの国際関係と遣隋使」が、西嶋定生・堀敏一氏の研究を踏まえて東アジア世界設定の意義について述べ、また『漢書』から『新唐書』にいたる正史外国伝を通覧している。『隋書』倭国伝が比較的長文であるのは（具体的に字数を比較してある！）、隋が東アジア外交を重視していたことの表れとする指摘は興味深い。

氣賀澤保規「アジア交流史からみた遣隋使――煬帝の二度の国際フェスティバルの狭間で」は、斬新で大胆な刺激に満ちた論文である。五八九年の第一次高句麗遠征は、文帝による東アジア拡大路線の起点となる政策であり、六〇〇年の遣隋使はこうした国際情勢を受けての派遣であったこと、六〇七年の遣隋使も、煬帝による外交戦略との関わりを重視すべきこと、裴世清が倭国への使者に選ばれたのは、煬帝の側近裴矩（裴世矩）の同族であったことによると考えられること、さらに、第三次高句麗遠征が終息した六一五年正月に洛陽で「国際フェスティバル」が開催されているが、これは煬帝の政治的な思惑によるもので、倭国もこれに参加すべく、六一四年の遣隋使が派遣されたものの、百済ともども動乱に巻き込まれて帰国したと推測されること、などなど、隋の国情を十分に考察し、その中に倭国遣隋使を位置づけている。煬帝による「二度の国際フェスティバル」――一度目は六一〇年に行われた――が、隋の外交戦略であったという仮説は魅力的である。遣隋使研究に新しい景色が広がったような思いを強くした。

第Ⅱ部からは、林部均「遣隋使と飛鳥の諸宮」と河内春人「遣隋使の「致書」国書と仏教」を紹介しよう。林部論文は、飛鳥時代の王宮について、遣隋使のもたらした中国の王宮についての情報が、どのように影響を及ぼしたのかを、近年の発掘成果によりつつ、具体的に検証している。まず推古朝の小墾田宮の復元について、岸俊男説への疑問を呈した上で、近年の考古学の発掘調査の成果を踏まえ、中国の影響は少なかったことを指摘する。そして飛鳥宮のⅡ期遺構（皇極天皇の飛鳥板蓋宮）に画期があり、それ以前に倭国は中国の王宮構造を理解はしていたものの、実際の王宮の整備は一時期遅れたとする。飛鳥宮Ⅱ期遺構には、外交儀礼のための空間は存在しなかったが、併存した難波宮が西国支配と外交を担当した。そして最初の遣隋使派遣から約一〇〇年たって、藤原宮の大極殿・朝堂に、中国王宮の思想は実現されることになるとみる。

河内論文は、遣隋使が持参した「致書」形式の国書について、致書形式の書状を

僧侶が用いていること、「天子」呼称も『大智度論』を踏まえていることを示し、この国書に仏教的色彩が強いことを指摘する。その上で『大智度論』の受容に高句麗との関係を見、また外交文書に僧侶が関わった事例（新羅など）をあげて、国書を起草したのは慧慈である可能性が高いとする。国書の起草者として慧慈を想定した先行研究はあるが、河内説はより説得的な推測だと思う。

第Ⅲ部は、本書のタイトルでもある「遣隋使のみた風景」を、推測も交えながら、復元するという試みで、一種の旅行記のように楽しみながら読むことができる。なお氣賀澤保規「倭人がみた隋の風景」には、二〇一一年に新たに紹介された「清張庚諸番職貢図巻」により、「梁職貢図」の「倭国使」題記が復元され、全文読み下してあって、うれしい。

有益な付録もついて、全四四八頁、厚みが三・五センチメートルあるにも関わらず、三八〇〇円（税抜き）というコストパーフォーマンスの良さは、それだけでも称賛に値すると思うが、内容の充実していること、「一四〇〇年前の遣隋使を徹底検証！」という表紙の煽り文句は決して大袈裟ではない。執筆者間で史料の読みや解釈が統一されているわけではないので、全編通読するととまどうところもあるが、それも遣隋使研究の現状を示しているといえる。そして本書は「遣隋使のみた風景」だけでなく、「遣隋使研究の新しい風景」を広げてみせてくれた。

シンポジウム企画者で本書の編者である氣賀澤保規氏は、もともと六〇〇年の遣隋使派遣から一四〇〇年にあたる二〇〇〇年に記念シンポジウムを計画していたという。七年がたち、機が熟したところで開催されたシンポジウムは、敢えて日本（倭国）を前面に出さず、東アジアあるいは隋を視座に据えた内容であった。それからさらに五年がたち、日本古代史や朝鮮史の視座を新たに加えて、本書は成っている。構想の種が播かれてから十二年、遣隋使研究の到達点と新地平を示す内容として結実したと高く評価されよう。

（まるやま・ゆみこ　愛知県立大学）

アジアからの世界史像の構築と
アイデンティティの創生
――中国・韓国・日本の視点から

▼日時＝9月15日（土）、16日（日）13時～17時（各日共）▼場所＝成蹊大学4号館ホール（15日）、8号館101教室（16日）東京都武蔵野市吉祥寺北町3の3の1 ☎0422-37-3549（成蹊大学アジア太平洋センター）http://www.seikei.ac.jp/gakuen/accessmap/ ▼参加費＝無料＊交流会があります（16日17時半～）

▼プログラム＝［15日］グローバル・ヒストリーのなかのアジアのアイデンティティ（濱下武志）、通底する「朝鮮半島問題」の論理――北の核と領土（福原裕二）、日韓中近代化の比較――過去・現在・未来（光田剛）、反芻から創生へ――日韓中〝魯迅〟像の考察（湯山トミ子）［16日］中国革命――その思想史的意義（孫歌）、アジアから見える新しい世界史像（宇野重昭）、質疑応答